

着物の変化

ギョチキョン・エスラ

群馬大学

社会情報学部

13687004

着物の変化

ギョチュギユン・エスラ

1. 世界中で有名な着物

1. 1 着物とは

着物は日本の文化の一つとして世界中で有名である。着物は元来「着る物」という意味であり、単に「衣服」を意味する語であった。しかし、江戸時代の終わりに洋服が輸入し、「西洋服」・「洋服」と区別して、日本の従来の衣服を「和服」と呼ぶようになり、更に「着物」の語にも置き換えられるようになって来た。着物に大きな影響を与えた国は中国である。

現在の着物は前代の着物より変わってきて、着物を着るのも次第に減っているため、日本論文で、なぜ着物は変わって来たか、また、なぜ現代着る人は少なくなっているのだろうか説明する。

2. 着物の歴史的な変化

2. 1. 縄文時代の服

縄文時代には、今知られている着物はまだなかった。一般的に、上と下の二つの部分であって、布から作られた服があった。この服の性差別はあまりなかった。縄文時代の服はほかの国の紀元前の服とほぼ同じと考えられている。布は麻から作られた。腰には糸や布などが結ばれた。

2. 2. 初めての着物

初めての着物は大和時代に作られた。この時代に中国の北で天気は変わって、水などが少なくなってしまった。その結果、日本に引っ越した中国人が多かった。日本に来た中国人は着物を作ることに貢献し、二つのことを日本人に紹介した。一つは絹であって、もう一つは中国人が着た「はんふ」という服である。着物は、染めることは知られていなかったの、色は白かった。着物の袖は狭かった。

飛鳥時代に着物は染めるようになったが、一枚の布でさまざまな色ではなくて一つの色だけ使われた。花、とりなどの絵を描くのはまだなかったの、着物はまだ地味であった。大和時代の着物よりこの着物の袖はもっと広くて長く作られた。さらに、正式な着物、制服の着物と御殿の着物と三つのグループに分けられた。その三つのグループの順位は着物の色から分かれた。

2. 3. きれいな着物の時代平安

平安時代に着物は中国ではなくて、やっと日本の文化を表すようになった。美術や美しさに対する愛は着物に映られた。色で四季が分かるようになった。この時代に、正座は重要になったの、簡単に座ったり、立ったりするために着物のサイズはもっと広がった。

十二単という着物もこの時代に初めて見られる。十二単とは、特に貴族の女性が12～20枚の着物を重ねて着た着物である。すべての色は別々であって、そこから見られるように着られた。色は季節、美德と五行をあらわしていた。この時代で作られた他の着物は；御殿の男性が毎日着る「のし」、御殿の役員が着る「そくたい」とうねめという王のために働いている女性の着物であった。

2. 4室町・江戸時代

室町時代に侍の影響は多かった。侍は能動的だったので、動きやすくするためにもっと地味で簡単に動ける着物が作られた。女性の日常服は小袖であった。正式なイベントのとき「うちかけ」という、とても綺麗で、重くてコートのような着物は小袖の上に着られた。

江戸時代にうちかけは結婚式のとき花嫁が着る着物になった。

江戸時代の前期に着物を染めることは開発した。花や鳥など、さまざまな絵を描く時「友禅」という方法は使われた。初めに、友禅の方法は大変だったから、友禅で作られた着物の価格は高かったのでお金持ちの人だけかうことができた。しかし、時間がたつにつれて人々は、原紙を見つけて、着物に絵を描くことを簡単できるようになった。その結果お金持ちの人だけではなくて普通の人も友禅で作られた着物を着るようになった。

この時代の人々は着物の美しさを見せるために、前代と違って一枚だけを着始めた。そして、腰の前に結ばれた帯は背中に結ばれるようになった。帯の結び方も開発し、様々できれいなかたちで結ばれた。

江戸時代の後期に鎖国政策により、海外から絹を輸入されなくなったので、国産の絹は使われた。初めに、安くても、絹の着物を着た人が大勢いたが、将軍は1785年に天明の大飢饉のせいで庶民が絹製品を着用することを禁止した。その結果着物は江戸時代の最後に地味になり始めた。

2. 5 明治時代から現代までの着物

明治時代に鎖国政策は終わって、日本人は海外と政治的な関係をつくり始めた。外国からほぼ3000人の従業員は日本に来た。そして、日本人も勉強のために外国に行き始めた。農業は開発し、日本は世界中で絹を輸出している国として第一になった。縮緬・綸子・御召などが海外から輸入され、着物は絹だけではなくて、他の安い布からも作られるようになった。

この時代に国際的に開発されたので、洋服は許可された。特に政府のために働いている男女は職場で洋服を着はじめた。軍人や学生は様式の制服を着始めた。女性の制服として、洋服のセーラー服が採用された。しかし、家にいる時、洋服で畳に座るのは大変だとおもわれ、家では着物でくつろぐ習慣が一般的であった。

1914年に始まった第一次世界大戦のとき政府は軍備のため絹に税金をかけ、着物はさらに地味になった。そして、男性は着物を着ないようになって、女性の中で着る人はだいたいお母さんや叔母さんなどであった。

昭和時代に着物を着るのはだんだん少なくなってきた。ほぼ1970年頃着物は、茶道、結婚式や成人式など、特別なイベントで着られるようになり始めた。

3. 現代の着物

現代では茶道、成人式、結婚式や卒業式などでしか着物を着る人が見られなくなった。結婚式の時でも、着物を花嫁、花婿やその二人の親族しか着る人はいない。なぜこんなに

少なくなったかと聞いたらもっとも大事な理由は明治時代の時ヨーロッパやアメリカからもらった影響だ。その時、海外と等しくなるために外国の文化を採用した。そのほかの理由はいくつか挙げられる。ユーチューブにある中国の「びっくり日本」と言うインタビューチャンネルは成人式の時にしたインタビューで「着物を着るのはどうか」や「辛いか」と聞いたときだいたい皆同じく答えた。その答えは「背中が苦しい」、「歩き辛い」、「トイレに行くのは大変」などであった。または、着物の生産は過去30年で90%減った。その結果、着物の価格は高くなった。今着物のセットを買おうとしたらおよそ10万円かかる。借りるのは5万円ぐらいかかる。さらに着物を着る人と共に着物の着付けができる人も少なくなっている。

4. 終わりに

着物は中国からの影響で作られた。時代によってときどき地味でときどきたくさん絵や色で作られ、社会的な事件や発明など、さまざまな影響で変わってきた。日本らしくなったため、平安時代は着物の最も大事な時代だといってもいい。現代アメリカやヨーロッパの影響、または着用するときのさまざまな不便で着物を着ることは減った。

このままで続けば、伝統的な着物を着るのは次第になくなるのではないかと考える。着物がなくならないために最初は一般的に日本の若者に意識を持たせて、自分の文化を守ることの大切さを教えるべきだと考える。例えば、現在トルコでトルコの伝統的な服を着る人はいないと言ってもいいくらい少ない。結婚式の前の日「クウナ・ゲジェシ」という女性会のようなイベントで花嫁しか伝統的な服を着る人がいない。そのほかは、伝統的な踊りをするとき着る。そして田舎で済んでいる叔母さんや叔父さんなども着るが、数が少なくなっている。トルコもアメリカやヨーロッパから多くの影響をもらえるから文化を大事に

する若者は次第に少なくなっている。さらに、文化を守るために意識を持たせる人もあまりいない。一方、日本でトルコよりまだ文化を大事にして、将来にそれを続けたい人が多くいるので、日本でこの美しい文化を続けるのはもっと簡単にできると考える。それで、現在の若者はさらに意識をもって、日本のこの美しい文化を続けるべきだと考える。

参考文献

1. <http://www7a.biglobe.ne.jp/~gakusyuu/rekisi/rekisitema.htm>
2. <http://web.mit.edu/jpnet/kimono/history-muromachi.html>
3. <http://www.humanities360.com/index.php/history-of-the-japanese-kimono-2-55004/>
4. <http://www.mansfield-devine.com/Dating-kimono.html>

着物を歴史をまとめる際、以上（1. ～4.）のウェブサイトを参考にした。

5. <https://www.youtube.com/user/xpcubex>